

翻 訳

包 身 工

夏 衍 著

張 新 力 (訳)

鹿 又 玲 子 (校正)

解題

著者夏衍 (1900–1995)、本名沈乃熙は浙江省杭州市出身で、地元の甲種工業高校を卒業後、1920年に日本に渡り、1922年9月九州の明治専門学校電機科に入学した。日本留学中は、文学、哲学に親しみ、社会主義に接近し、1924年孫文の紹介で中国国民党に入党し、国民党駐日総支部常任委員兼組織部部長を担任していた。1927年日本に追われ帰国、帰国後共産党に入党し、上海で左翼戯劇家連盟を組織して、「プロレタリア戯劇」のスローガンを打ち出し、映画『狂流』、『春蚕』、現代劇『秋瑾伝』、『上海屋檐下』などを創作した。

新中国後、氏は上海で映画文学研究所の成立に携わり、1954年文化部副部長 (文化省副大臣) に任命され、1977年対外友協副会長、1982年中央顧問委員会委員、映画家協会主席などの要職を歴任し、1994年国務院から「国家に傑出した貢献のあった映画芸術家」の称号を受けた。

夏衍はプロレタリア戯劇を展開する傍ら、外国のプロレタリア文学の紹介にも努めた。小林多喜二が『蟹工船』を発表した翌年に、夏衍はそれを雑誌『拓荒者』第一号に紹介した。氏の多くの作品の中で唯一のルポルタージュ作品『包身工』は『蟹工船』の影響を大きく受けたと見られている。

ここで翻訳している『包身工』は、夏衍が1936年に発表した上海の日系紡績工場で働く女工たちの生活を紹介するルポルタージュで、中国版『野麦峠』に譬えられる。「包身工」の「包」は借り切るという意味で、日系紡績会社に労働者を紹介できる上海人＝「帯工」が田舎の若い娘たちを20円で三年間借り切り、彼女たちを紡績会社で働かせ、稼いだ給料を自分の懐に入れる。包身という特殊な契約形態のもとで重労働と苦しい生活を強いられ、法律にも守られず、都市労働者の助けも得られない実態を社会に訴えている。

新中国になってから、『包身工』はその文学的価値より、帝国主義と買弁勢力が結託して中国の労働者を搾取、略奪する犯罪行為を暴露した文章として教育的な意味が強調され、1950年代から高校一年生のテキストに君臨してきた。

近年、労働者を悪条件の下で酷使し、それに見合う報酬を与えない個人経営の企業が増えたことにより、「現代の包身工」の存在がしばしば報道された。「包身工」は今や「奴隷労働者」の代名詞として固有名詞化している。したがって、「包身工」という言葉の語源を知るとは、現代、及び今後の文学作品、新聞報道、経済事情を理解する上で大きな意味があるとして、この文章を翻訳したわけである。

季節はすでに旧暦四月の半ば。暁の明星が四時過ぎにようやくたなびくうす雲の中にゆっくりと姿を消した。蜂の巣のようにびっしり詰まったベッドの中で人々がすでに動きはじめた。

「ベッドを畳むぞ。起きろ！」

季節に不似合いなシルクの服を着た男が怒ったように叫んだ。

「^{ルーチャイバン}葦柴棒！ 台所の火をおこせ。バカ野郎、まだ寝ているのか、豚め！」

幅七尺、奥行十二尺の工房の階下には「豚め」と呼ばれる人間十六、七人が雑魚寝している。この威勢の良い怒鳴り声によって、汗と糞尿の悪臭と湿気がたち込める中、彼女たちは蜂の巣をつついた様にざわざわと動き出した。あくびをする者、ため息をつく者、なにやら叫んでいる者、服を探している者、靴を履き間違える者、人を踏んでしまう者、枕元から一尺も離れていない所にあるおまるで音を立てて小便をする者もいる。成人の年に近い若い娘に共有する羞恥心などは、この「豚め」と呼ばれる人たちには、もはやなくなっているようだ。半裸の格好で起きあがりドアを開け、ズボンを下げておまるの取り合いをする。体をちょっとそむけるだけで、堂々と男の前で着替えをする。

男は素早く起きない者を足で力いっぱい蹴ったあと、身を翻して二尺足らずの階段に立ち、二階にいる者に向かって、

「殴るぞ、まだ起きないのか！ 怠け者、太陽が昇りきるまで寝ているつもりか」と怒鳴った。

ぼさぼさの頭に裸足、寝ぼけまなこの幾人かの「怠け者」がボタンをかけながら足早に降りてきた。水道の蛇口の前は人がひしめき、水を手で掬っては、顔に掛ける。^{ルーチャイバン}葦柴棒は大鍋のお粥が早く沸かないと焦りながら、かまどから逆流してきた青い煙にむせて激しく咳き込んでいる。彼女は十五、六歳で、ここの親方以外、彼女の名前を知っている者は

包身工

いない。手足が芦の茎のように痩せ細っているから、みんなが「葦柴棒^{ルーチャイバン}」と呼んでいる。

ここは楊樹浦福臨路東洋紗廠の宿舍だ。赤煉瓦の壁で嚴重に封鎖された長方形の宿舍の区域がさらに真ん中からセメントの細い通路によって二つの長方形の区域に分けられている。両側にそれぞれ二階建ての建物が八列建っており、一列に五室、部屋は上下合わせて八十室、まるで鳩小屋のように均等に分かれている。それぞれの仕事場の階上階下には、親方に「豚め」とか「怠け者」とか呼ばれる者が平均して三十三人ずつ住んでいる。すなわち、この宿舍の区域には「帶工^{ダイグワン}」と呼ばれる親方とおかみさん、その家族や親戚、それに（冒頭に出てきた）シルクの服を着た男のような仕事をする雑役夫、用心棒のほか、二千人ぐらいの「豚ども」が、自らは襤褸を纏いながら縁もゆかりもない他人が着る服の生地を作っている。

彼女たちの正式な名称は「包身工」なのだ。彼女たちの体は「帶工」と呼ばれる親方との奇妙な契約ですでに売られている。毎年、特に水害や早魃のひどい時などには、これらの東洋工場に伝手を持つ帶工が故郷や水害、早魃の地域に自ら足を運んだり、また代理人を使って出向わせたりして、長年鍛え上げた弁舌をふるい、一本の稲の藁さえ金塊だと言いくるめ、子供が養えず、そうかといって目の前で餓死するのを見るに忍びない同郷のものたちを説得するのだ。

「言うまでもないが、住むところは会社の洋式の宿舍だ。食べるものは魚や肉、月に休みが二日ある。街にだって遊びにつれていってやる。何十階建てのビル、二階建てのバス、面白い素敵な舶来品がたくさんあるよ。同郷ではないか！ たった一度の人生。外の世界も一度見てみるべきだぜ。」

「三年勤め上げたら、その後の稼ぎはそちらのものさ。一日一元にはなる。ほかの人が頼んでもだめだね。同郷のよしみがあるからこそ、名簿に加えてやるよ。」

「俺に任せれば絶対大丈夫だ。何かあったら、俺が故郷に帰れると思うか？」

この話を聞けば、草根樹皮を齧って生きている女の子はもちろんのこと、彼女たちの両親でさえ自分たちには一緒に行ける良い話のないことを悔しがるのは必定だ。そこで、事前に用意された「包身契」に「十」字を書くことになる。包身費はだいたい大洋二十元で、期限は三年。帶工は三年間の食と住を保証し、仕事を紹介する。稼いだお金は帶工の懐に入る。その間の生死疾病は天命次第。包身費の半分の十元が先払いされ、包身工が出発する日に残りの半分の十元が支払われる。そして、「後日の証拠として、此の包身契をつくる」となる。

福臨路の宿舍に住む二千人位の包身工は五十人以上の帶工に支配されている。彼女たちは言われるままに「帶工」のための金を稼ぐ機械なのだ。故に、それぞれの「帶工」が抱える包身工の数が、彼らの体裁と財産を如実に表わしていると言える。少ない者で三十人

から五十人。多い者は百五十人以上も抱えているのである。たくさん抱えている「帯工」は高利貸しをしたり、土地を買ったり、家を建てたり出来るばかりでなく、茶楼や浴室、床屋のような商売も経営することが出来る。

東洋^①工場は赤煉瓦の塀で囲まれたこれらの工房を毎月五元の賃料で「帯工」に貸し、「帯工」はこのハト小屋のような建物のなかに三十余台の移動式機械を入れている。工房だから、普通の家にあるような「前門」がなく、「前門」としてあるものは丁度普通の家「裏門」のようなものである。それぞれの入り口には長さ三寸ほどの札が掛けられ、札には漢字の日本的な書き方で「陳永田泰州」、「許富達維揚」など帯工の出身地と名前が書いてある。扉には大小の色褪せた赤い紙の春聯^②が貼ってあり、春聯の間に切り紙で作った元宝、如意、八掛^③が貼ってある。たまには「姜太公在此、百無禁忌」の木版画も見かける。春聯の文字はだいたい「積徳前程遠」、「存仁後歩寛」の類のもので、こういう内容の春聯をこんなところに貼られると、まるで他人に対する自慢と同時に自分に対する風刺に見えてしまう。

四時半過ぎ、影も輪郭もない朝の光がおずおずと現れるころ、セメントの道と通路はこれら裸足の田舎娘で溢れかえる。さわやかな少し湿気を帯びた朝の風は、淀んだ空気の中で生きている彼女たちにとって自然のもたらした無上の恵みであろう。彼女たちはざわめき始め、蛇口から水を汲む者もいれば、歯の欠けた木櫛で執拗に髪にくっついた綿を落とそうとする者もいる。つづいて、二人一組になって天秤棒を担いで溢れんばかりに糞尿の入ったおまるを運び、大声をかけながら人すれすれの所を通っていく。「帯工」または雑役夫が出勤簿を手に、駅の改札口のような木柵の出入口に面倒くさそうに立った。階下のムシロとぼろ布団を片付けた後、夜寝るときに壁に吊りかけたテーブルが二つ下された。十数個の茶碗と一束の箸をテーブルの上に無造作に置いた後、お粥当番が糊のような薄い粥の入っている亜鉛めっきのバケツをテーブルの真ん中に置いた。彼女たちには一日に二粥一飯が提供される。朝晩は粥で、昼だけは御飯が出る。昼の御飯と夕食の粥は親方が人を使って工場に届けさせる。その粥はというと、とても普通一般の粥とは比較することさえ憚られる。わずかな米に鍋底の焦げや屑米、田舎では豚の餌にするおからもたくさん入っている。漬物なんかはとても望めない。何人かの「慈悲深い」親方が市場から菜っ葉をかき集めてきて塩に漬ける。それが彼女たちにとって得難いごちそうになる。

細長い腰掛けが二つしかない。しかし、たとえもつとあつたとしても、この部屋は30人が同時に食事する広さもない。彼女たちはわつと集まってきて、争うようにお椀に粥をいっぱい入れると、お椀の外側に垂れた粥を、首を曲げてぺろりと舐めた。その後、各自ばらばらにそこら辺にしゃがんで食べる者もいれば、入口や路地に立って食べる者もいる。おかわりは特別な日以外には考えられない。特別の日とは親方やおかみさんの誕生日、給

包身工

料日などである。床掃除やおまる当番に当たると、一杯の粥さえありつけないときもある。バケツの中はもうからっぽになったのに、その一杯もまだもらえない人たちがいて、彼女たちの手の中には空の茶碗があるばかりである。すると、おかみさんはバケツを持ち帰って、鍋のふちにくっついた粥と焦げつきをこそげ、蛇口から冷たい水を足したかとおもうと、さっきまで髪を梳かしていた脂っぽい手の中に入れてひと混ぜし、それをこれらの廉価であり「維持費」のかからない「機械」たちの前に置いて、ぶんぶんしながら言った。「怠けもの、起きてこない罰だよ！」

十一年前内外棉の顧正紅事件^④、特に、五年前の「一二八」戦争後、東洋工場はこのような廉価な「機械」に対する需要が急に増えはじめた。これはきわめて経営原則と経済原理に合っている方法だと聞いている。「」付きの機械はしよせん血肉でできている人間であるから、彼らの忍耐限度が極限に達すると、彼らが長い間忘れていた人間特有のある種の力を自然に思い出すのである。時には、「愚か」な奴隷は束になった矢は折れないという理論が分かってくる。消極的ではあるが、彼らにも抵抗手段がある。つまり、どんなに飢えようとも絶対働かない。そのほかにも、産業労働者の「流動性」は近代工業の経営者をもっとも嫌うところである。しかし、彼らは決して「流動性」の根源を追求しようとはしない。ある植民地で人事経験を持つ自称「温情主義者」の日本人がある著作の序言に次のように書いている。「今回の争議（五・三十）^⑤の中で、警察の力はなんの権威もなかった。民衆の団結力の前では、いかなる権力も無力になってしまう。」しかし、結果的に、温情主義を通したであろうか？ そうではない！ 彼らが用いたのは、「外の労働者（普通の自由労働者）」の代わりに廉価で「結合力」のない「包身工」を雇うという方法であった。

第一、包身工の体は親方に貸し切られているのだから、彼女たちには「やる」「やらない」の選択をする自由がない。彼女たちの毎日の給金が親方の利潤であるため、たとえ病気になっても、親方は工場側に代わって拳骨、棍棒、冷水を使って強制的に彼女たちを働かせる。前に話した^{ルーチャイバン}葦柴棒を例にしよう（実際、このような事はすべての包身工の身に起こりかねない）ある寒い朝、葦柴棒がインフルエンザにかかり、ベッド（？）に寝ていた。彼女たちの寝る場所は時間になると、お粥を食べる場所として空けなければならない。しかし、その日、葦柴棒はどう頑張っても起きられなかった。彼女は気兼ねをして、ゆっくりと体を部屋の隅っこに移し、できるだけ場所を取らないように体を小さく縮めた。しかし、このような仕事場で病気になって横になるという先例を勝手に作ることは許されない。すぐさま一人の雑役夫がやってきた。この種の仕事をしている人のほとんどが親方の親戚か地元のごろつきで、ここでは彼らが生殺与奪の権力を握っている。葦柴棒はもうのどがかすれて声が出せない、手振りでは自分には起きる力がないと、哀れみを乞った。

「仮病だ！ 俺が治してやる！」

雑役夫は彼女の髪を掴むと彼女の体を高く持ち上げ、思いっきり地面に投げ付けた。葦柴棒は地面に這いつくばった。間髪をいれず雑役夫は彼女の足を蹴り始めた。いつもなら2回3回と蹴り続けていく。しかし、雑役夫はすぐにあげた足を止めた。葦柴棒の突き出た脚の骨にぶつけて、足の指が痛かったからだ。雑役夫はカッ! となって、テーブルを拭いている他の包身工の手から冷水の入った盆をひったくると、葦柴棒の頭からぶっかけた。冬である。外は冷たい風が吹いている。葦柴棒は水を浴びせられ反射的に跳び上がった。入口で歯を磨いていた親方のおかみさんが笑って言った。

「それ見ろ! やっぱり仮病だ。しっかり立てるじゃないか。盆一杯の水で治っちまった。」
これはごくありふれた例にすぎない。

第二、包身工は田舎から出て来て間もない。しかも、そのほとんどが親方と同郷という点は「管理」上極めて有利な条件である。工場側は宿舎の周囲に囲いを造り、入口の内側に警備員を一人立たせ、外側に「工房重地、閑人莫入」の札を掛けた。これだけで、これら「田舎娘」を外の世界から隔離できるほか、管理の権利を全面的に帯工に任せられる。このようにして、朝五時に雑役夫か親方のどちらかが彼女たちを工場に送り、夕方六時に迎えにくる。彼女たちは永遠に「外の人」と接触する機会がない。ゆえに、包身工はある種の「缶詰にされた労働力」で、「安全に」保存できるし、自由に取り出して使えるし、外の空気と接触して変質する危険が絶対がない。

第三、言うまでもなく、工賃の安さである。包身工は「帯工」に工場に送り込まれた後、彼女たちの名前がまた変わるのである。工場側では彼女たちを「実験工」または「養成工」と呼ぶ。「実験工」とは工場側が新人に働く能力の有無を確かめる期間で、「養成工」とは「見習い」を「熟練工」に養成する期間を意味する。最初は一日12時間働き、1-1.5角の給料が支給される。仕事は技術のいらぬ床掃除、包装解き、原綿運び、綿ほぐしなどで、何週間か経つとカード、スライバー、粗紡に配置される。工場所有者の本国では包装解き、原綿弾き、カードなどは男がやる仕事だが、上海では彼らが「社会の糾弾」や「官庁の監督」を心配する必要がないため、こういう無理な仕事を男性の給料の1/3で女性にやらせている。

朝五時、第一声が力強く響き渡った。赤煉瓦の缶詰の蓋—あの鉄の扉が開くと、クサリのついていない奴隷たちが地鶏やカモが放されるように無秩序にどつと押し出してくる。彼女たちは手にハンコを押すための出勤簿を持ち、ほとんどしゃべらない。もし、しゃべっていたとしても生気がない。戸口を出ると、この人の流れが分かれた。第一工場は東へ、第二三五六工場は西へ。百歩も歩かないうちに、彼女たちはもう一つの流れと合流する。同じ東洋工場で働いている「外の労働者」達である。ところが、近辺に住んでいる人たちはこの人の流れの中の二種類の分子を簡単に見分けられる。外の人洋服は多少清潔で、

包身工

チャイナドレスを身に纏っている人、黄色や水色のゴム靴を履いている人、また、十七、八の女の子などは時には白粉をつけているし、パーマをかけている人もいる。包身工はこれらには縁がない。彼女たちは皆、上は色褪せて油で汚れた黄緑や薄紫の短い上着。下には黒や緑色のズボン。長い髪、三つ編みにしている人も少なくない。汚い布靴が破れかけている。以前纏足していた足が元に戻らず、歩くとふらつく。歩いている途中、この二種類の人間はめったに言葉を交わさない。汚く、田舎くさく、野暮ったく、(方言が強くて)言葉が通じないなど、これら全て彼女たちが親密にならない原因かもしれない。「外の労働者」の心の中には、過度に自分を高く評価し、不必要に他人を軽蔑する気持ちが潜在している。彼女たちは包身工に比べ自分達には、むしろ、腹を空かせる自由もあれば、いつでも工場を変え仕事を辞める権利もあると考えている。

赤煉瓦の怪物はもうすでに大きな口を開けて滋養物を待っている。インド人の警備員[®]が鉄の門の門番をしている。守衛室に彼女たちが労働力を貢献する許可書を出す。包身工たちはハンコを押す出勤簿を出すだけで良いが、外の労働者はこのほかに写真の貼ってある入場許可書が必要だ。この許可書には十一年の歴史がある。顧正紅事件の後、内外綿にはストライキが起きたが、他の東洋工場の一部は操業していた。そこで、内外綿の労働者は上海西部にある豊田工場に紛れ込み、内外呼応してストライキを起こした。事件後、豊田工場の発案により、労働者が工場に入出入りする際、このような写真付きの証明書が必要となった。—この制度は東洋工場独特のもので、中国工場にはもちろんない。英国工場、例えば怡和工場は、労働者が工場に入る時、見習いをさせるために(もちろん無給)親戚や自分の子供を連れていってもかまわない。工場内では七、八歳甚だしくは五、六歳の未成年労働者を随所に見かける。この子たちはもちろん給料のいらぬ「おまけ」だ。

服を作るための数知れない紗、靴下を編むための一本一本の糸、これらはみな身につけると光沢があり着心地が良い。着ていると楽しくなる。しかし、綿花から紗にするまでの工程は決して服を着るような愉快なものではない。紡績工場の労働者が恐れている三つの脅威は、騒音と埃、それに湿気なのである。

楊樹浦行きのバスがチチハル路を通る時、「ザーザー」というにわか雨の音と「ゴーゴー」という雷鳴が入り混じって聞こえる。工場に入ると、猛烈な騒音が人の聴覚を破壊、いや、麻痺させる。モーターが吠え、ベルトの衝撃音、紡錘の回転音、歯車の軋む音……、人間の嫌がる音のすべてがまるで圧縮された空気のようにこの赤煉瓦の工場に詰め込まれ、何の音なのか聞き分けることができない。また、それらの音を聞き分けようとする余裕も持たせない。紡績職場の「落紗ラウシヤ(かせ繰り)」と「蕩管タアングウアン」(巡回管理をする上級の日本人女工、日本人は「見回り」と呼ぶ)が何か命令を出すとき、言葉や手振りなどは使わず、口にくわえたホイッスルを吹く。ホイッスルの高く鋭い音でしかこの張りつめた空気を突

き破ることができない。

埃、その気持ちの悪さは更に予想以上のものである。精紡粗紡職場の空間には無数の綿埃が飛んでいるのが肉眼でもわかる。床掃除の女工はいつも箒を地面に押しつけ、床を拭くように押して進む。一人が一本の「通り道」（二台の機械の間の通路）を絶え間なく往復しているにもかかわらず、細かい雪のような綿埃が地面に積るのが見える。綿弾き、包装解き、カードの作業場などは言うまでもない。包装解きという仕事は梱包を解いて原綿を出し、手でほぐしながら中に混じっている余計なものを取り出す。現在の東洋工場はこの仕事を全部包身工にやらせている。彼女たちは言うことを聞いてくれるし、他の労働者がやりたがらない仕事をもやってくれるからだ。このような仕事場ではどんな服を着ていてもすぐに薄灰色に変わってしまう。室内に舞う綿毛はまるで悪戯好きの小悪魔のように、空きあれば彼女たちの五官に潜りこんでくる。髪、鼻、睫毛、すべての毛穴、みんな綿が身を寄せる場所である。これらの綿毛が身に纏わりつく感じを知りたいなら、仕事で汗をかいたとき、目の前で誰かが振り撒いた枕の芯の綿毛が体にべっとり粘りついた、と想像してみればわかる。紡績工場の女工には健康な顔色をした者がいない。十二時間働いて平均〇、一五グラムの綿埃を吸い込むとの調査結果がある。

重苦しい湿気も紡績工場の工具、とりわけ機織りの労働者にとって最大の脅威である。彼女たちは一年中梅雨時を過ごしているようで、毎日水蒸気いっぱいの熱気に包まれている。綿糸の特性から見て張力と湿度は正比例する。分かりやすく言えば、湿度が高ければ、綿糸が切れにくいのである。そのため、噴霧器は機織り職場の欠かせない装置の一つになっている。機織り職場では、すべての機械の端に絶えず水蒸気を噴射する噴射口があり、手をかざしても五本の指が見えず、対面に人が立っていても見えないほど湿度が高い。体に蚊や虱に刺された痕や、機械にぶつかって皮膚に擦り傷があつたりする場合、すぐ化膿していただける。真夏日に115-6%の湿度の環境下で働く情景は、決して「外の人」が想像できるものではない。

自然現象だろうか、生物が上述の三種の脅威のもとで仕事をすると、疲れが加速度的に進む。とくに夜勤のとき、野獣のような鉄の暴君の監視人がいるため、居眠りなどできるわけがない。切れた綿糸をすぐにつながなかったり、紡錘のカバーが破れたり、軸の方向を間違えたり、機械のまわりに何か積もったりしただけで、すぐに監視役（工頭）や見回りの罵倒、拳骨に遭う。近年、殴打のようなことは少なくなったが、しかし、このような「幸せ」は「外の労働者」に限られている。監視役や見回りが人を殴るようなことをすると、同じ職場の労働者の反感を買い、その場で何も言わなくても、職場以外のところで「友人を呼ぶ」、^{ピインリ}「品理」、^{グシヤンダ}「打相打」^⑦を使われる危険がある。しかし、包身工には「朋友」と手助けしてくれる人がいない。誰でも彼女たちをいじめることができるし、また誰にでも軽

包身工

蔑される。彼女たちは最底辺に生きる「最低限の人間」で、監視役や見回りにとっては、自らの怒りを爆発させたり威勢を張る対象なのである。紡績工場の「規律違反」の罰則は、体罰、給料減額と「仕事停止」の三つである。しかし、包身工の所有者―帯工の立場から見れば、後の二つが当然不利である。給料減額が親方の利潤減少につながるし、仕事停止の場合、お金を稼げないだけでなく、二粥一飯をただで食わせることになる。そこで、帯工は考えもせずに体罰という方法の使用を歓迎する。毎年、端午の節句や重陽節、年末年始に帯工は監視役に贈り物を届けに行く。そのとき必ず卑屈な態度で、

「うちの娘たちが何か悪いことをしたら、お好きなように殴っていい。給料の減額と仕事停止さえしなければ、死ぬまで殴ってもかまわない。くれぐれも宜しく」と言う。

死ぬまで殴ってもかまわないという状況の下、包身工たちは当然「誰でも勝手にいじめてよいもの」になる。ある日、小福子^{ショウフーズ}という子が糸くずを片付けた後、すぐにしまわなかったので、監視役に殴られた。運が悪く、ちょうどそのとき「東洋婆」（日本人女性）がやってきた。監視役は日本人の雇い主に自分の威力を示そうと、また、自分の管理の厳しさを知ってもらおうとして殴っている手にいっそう力が入った。東洋婆はしばらく見ていたが、この非「文明」なやり方を嫌うせいか、それとも、もっと合理的な懲戒方法を紹介するためか、近寄ってきて、小福子の耳をつかみ消火栓の前まで引っ張ってくると、壁に向かって立たせた。監視役も付いてきて、心得たとばかりに、そこら辺にあるベルトの芯を小福子の頭に載せた。東洋婆は会心の笑みを漏らした。

「この娘、ちょっといけない、怠けている。」

監視役も彼女のなまった中国語をまねて、「ベルトの芯を載せれば居眠りできない！」と言った。

このような「文明的な懲罰」は、時には二時間以上続くこともある。二時間働かなければ、その日の仕事を完成できない。その分給料が減らされるので、帯工に殴られることも避けられない。拳骨のほかに、食事を与えられなかったり、吊るされたり、暗闇の部屋に監禁されたりするなどの懲罰もある。

事実、監視役は外の労働者に対して別に優しくもない。拳骨、怒号のほかにもっと巧妙な手法があるからだ。たとえば、やりにくい「仕事」、やりたがらない仕事を遣らせたりするのもその一つである。だから、一部の「外の労働者」は監督に取り入るためにやむを得ずに節句や祭日に贈り物を送り、自分の安全を守ってもらう。汗水たらして稼いだ金で監督孝行することは、彼女たちにとってももちろん耐えがたい負担だ。けれども、包身工には贈り物をする権利さえない。外の労働者はこの余計な負担に不満をこぼすが、包身工たちは外の労働者が自分の金で監督に賄賂を贈る権利があることを羨ましがる。

特惠の保護のもとで廉価な労働力の滋養を吸収して、中国にある日系企業は飛躍的に拡

大した。福臨路にある日本工場だけを例にしてみよう。光緒28年(1902年)に三井系の資本が大純紡績工場を買収して最初の工場を開いた時、スピンドルは2万にも達していなかったが、30年後には紡績工場6軒、紡織工場5軒、スピンドル25万、織機3千、労働者8千人、資本金1200万円の規模に達した。アメリカの哲学者エマソン(Ralph Waldo Emerson)の友人のソロー(Henry David Thoreau 1817-1862)がかつてある本に次のように書いている。アメリカの鉄道のすべての枕木の下にアイルランド人の死骸が横たわっていると。そこで、私は日本工場のすべてのスピンドルに中国奴隷の魂の叫びが宿っていると連想する。

「一二八」戦争後、彼らの政策がまた変わった。その特徴はほかでもなく、もっぱら労働強化だった。統計数字もこの四年間におけるスピンドルと織機数の増加と労働者数の減少を表している。しかし、減少後の労働者の中にあっても、包身工の占める割合は劇的に増加しているのである。たとえば、楊樹浦にある某工場のスライバーの34人の女工のなか、包身工は24人いる。全般の割合もこれとほぼ同じである。たとえ包身工の数を低くみて、女工の半数を占めているとすれば、上海にある三十の日系工場で働く四万八千人のなか、工場と帯工のために働いている包身工の総数は二万四千人以上もいるのである。

科学的な管理と機械の改良で粗紡では一人の人が一台から一列を見るようになり、精紡では以前の一人が三十木管(1木管にスピンドル8個)から百木管を見るようになった。機械織りでは以前は一人の人が五台の織機を見ていたが、今は20-30台に改められた。表面的には加工量によって労働が評価される、つまり、生産量を増やせば給料も増えるように見えるが、実際はそう簡単ではない。工賃の単価がこの何年間で半分近く減った。粗紡の場合、以前は1「亨司」(840ヤード)単価8銭だったのに、今は4銭もない。だから、一人の人が一台の機械を使い12時間働いた場合、以前なら8「亨司」を加工して6角4銭が稼げたが、今は二台の機械を使い16「亨司」を加工しても工賃が4角8銭にすぎない。包身工にとって、給料の増減は自分たちに関係ない。とすれば当然、搾取された分は直接に帯工の帳簿の収入減につながる。

二粥一飯、十二時間勤務、労働強化、工房と帯工の家に対する無償労働、豚のような生活、土のように踏みじられている。血肉でできた「機械」はとうとう鉄鋼で作られた機械に及ばず、包身契約書には三年間と明記してあるが、満期まで働けるものは2/3にも満たない。働きに働いて、歩けなくなるまで衰弱してもやはり働かなければならない。手足は芦の莖のように痩せこけ、体は弓のように曲がり、顔色はまるで死人のようである。咳き込み、喘ぎ、冷や汗を流し、それでも、働けと迫られている。葦柴棒ルーチヤイバンを例にしてみよう、彼女は体が怖いほど痩せていて、仕事が引ける時、工場の入り口にいる「抄身婆」チイオンシンポー(女工の体を探って検査する女)が彼女の体を手で触りたくないぐらいだった。

「彼女に紐を巻きつけてあげよう、ドクロみたいで、彼女の骨を触ると夜怖い夢を見る

包身工

よ。」

しかし、帯工は怖い夢なんか恐れない。ある人が彼女のことを醜くてもないと思いい、「善行を積むと思って、彼女を放したら」と彼女の親方に言った。

「放す？ いいよ！ 二十元と二年間の飲食代、宿泊費を返してくれれば。」

「金を返してくれなければ、夢みたいなことを言うな！ 棺桶代をつけてもいいから、死ぬまで働いてもらう。」

葦柴棒の現在の日当は三角八銭で、去年の三角二銭を平均値として計算すれば、二年間で帯工は彼女の稼ぎ二百三十元を手に行っている。

もう一人、名前が思い出せないが、彼女はこのような生活に耐えられなくなり、いろいろと考えた結果、午前の十五分間の休みにこっそりと夜間学校で勉強している外の労働者に頼んで両親に手紙を書いてもらった。切手代もたぶん彼女に同情したあの女工が出したと思う。一か月過ぎても返事が来ない。彼女は焦りはじめた。ひょっとして父が上海に迎えに来てくれることを望んでいた。

しかし、返信は帯工の手に握りつぶされてしまった。仕事から帰ってくると、帯工と二人の雑役が入口に立っていた。凶悪な顔をした帯工が一步前を出て、思いきり彼女の髪をつかみ、蹴り、殴り、投げ飛ばし、はっきり聞き取れないぐらい嵐のような罵声が浴びせられた。

「この売女奴、よくもやってくれたな。おれの田舎での道を断たせる気か！」

「豚奴、一日三食、食べ過ぎてバカになったか！」

「殺すぞ、見せしめにするぞ！」

「誰に書いてもらったか、言え！ 言え！」

鮮血と悲惨な叫び声が工房中の人々を怯えさせ、皆がふるえている。全くのみせしめである。殴り疲れた後、かみさんの屋根裏部屋に吊るされた。その晩、工房中はその子の息も絶え絶えな呻き声のほかは何の音も聞こえなかった。真っ暗な闇の中、千人近くの奴隷たちは息を殺し目を見張って自分たちの運命を嘆いていた。

人間の体は時にはまったく不思議なものである。丈夫そうで肉つきの良い体をしていても麻の茎が簡単に折れるようにいとも簡単に死んでしまうことがしばしばある。が、葦の茎のように痩せこけた葦柴棒のような者が意外に一日また一日と耐えていくのである。いつ死んでもおかしくない躯体が、そこで粘り強く我慢している。二粥一飯、騒音、埃、湿気のなかで十二時間も働く。黙々と規則のある反復をしている。この反復は彼女の皮膚と骨に残存する血の最後の一滴を絞りきるまで続いていく。

この小娘を飼養して利益を貪る制度を見て、私は思わず幼いときに見た鵜飼船のことを思い出した。カラスのような変な格好をしている鵜が舷側に一列にとまり、その足は紐で

縛られている。水に潜って魚を取った鵜が船に戻ると、船主は鵜の首を軽く押さえ、魚を吐き出させるのである。吐き出したら、また水に潜り、また吐き出させられる。鵜は一日中魚を取り、その魚を売って得た金は船主のものになる。しかし、子供だった私たちから見て、船主はべつに鵜を虐待しているわけでもない。なぜなら、船主は鵜を飼育しているし、おなかいっぱい食べさせているからである。しかし、今この関係が人と人の間に転用されたとき、そのもつとも基本的な施しささえも存在しなくなった。

このおびたしい数の被飼養者には光もない、熱もない、希望もない、……法律もない、人道もない。そこにあるのは二十世紀の爛熟した技術、機械、制度、およびこの制度のもつて忠実に働く十五、六世紀封建制下の奴隷だけである。

暗い夜、静寂で、死んだような長い夜。表面上、ここにはまだ自覚も団結も反抗もないが、彼女たちは偉大な溶炉の中に置かれている。きらめく火花が時々彼女たちに降りかかる。しかし、これらの強く抑圧され強く圧搾された生物には引火し燃焼する火種さえ消えてしまったようだ。

それでも、黎明の訪れが阻まれることはできない。ソローがアメリカ人に枕木の下に横たわっている死骸に気をつけろと警告しているが、私も植民主義者にスピンドルに呻く魂の叫びに気をつけろと警告したいのである。

注

- ①. 日本
- ②. 正月に入口の両側に掛ける対句のような詩。
- ③. 古代に現れた自然現象や世間の様子を占う象徴的な意味を持つ符号。
- ④. 1925年5月上海内外綿紡績会社がストライキの労働者を鎮圧し、リーダーの顧正紅を殺害した事件である。
- ⑤. 顧正紅事件後、上海でさらなる大規模なストライキと抗議行動が発生し、大規模な鎮圧により死者13人が出る惨事になった。
- ⑥. 上海にある外国系銀行と企業はインド人の警備員を雇っていた。
- ⑦. 派閥間の紛糾を解決する方法である。